

.....
 研 究 ノ ー ト

ビンゲンのヒルデガルトの
 人間像について

エリザベス・ゴスマン

1976年にフランスの Poitiers において，“La Femme dans les Civilisations des X^e aux XII^e Siècles” という Colloquium が行われたが、そこで Marie Thérèse d'Alverny は“Comment les théologiens et les philosophes voient la Femme” というテーマで十二世紀の初期スコラ哲学を中心にして、その否定的な女性像について次のように述べた。“Hildegarde ne partage pas ces vues pessimistes sur l'humanité (sc. de la femme)Elle n'est pas un champion des droits de la femme,mais.....elle prend la défense de son sexe.” (p. 32s)

このAlverny の言葉はヒルデガルトの人間像についての探究を促すものである。

Alois Dempf はヒルデガルトをダンテよりも高く評価している。Alois Dempf の *Sacrum Imperium* という書物によると、彼女はドイツの十二世紀の Rupert von Deutz, Honorius Augustodunensis, Gerhoh von Reichersberg, Otto von Freising 等と同じように、⁽¹⁾ “Geschichtssymbolismus” の立場をとっている。即ち、彼女は歴史を象徴的に解釈するドイツの歴史哲学者の一人である。こうした歴史の見方はヒルデガルトの人間像とも関連したものであることを、私は後で指摘したいと思う。

ヒルデガルトの作品を表面的に読むと彼女も同時代の男性の哲学者と同じ様に女性について否定的に考えていた様に見える。例えば自己紹介という意味で、彼女は

何回も *mulier pauperula, femina indocta, simplex homo* 等という言葉を使って、自分が創造性の無い人間であると言っている。そして男性の強さと女性の弱さを精神と肉体、太陽と月との関係に対比させ、結婚した女性に夫に従うように忠告している。女性の弱さのために司祭職が女性に与えられることは不可能であるとも言っている。特に、同時代の社会や教会を強く批判しながら、彼女は *tempus muliebris debilitatis* という言葉を使って、今の時代が女性の弱さを特徴として持っていると言っている。こうしたことを根本にして、ある学者はヒルデガルトが同時代の人間像をそのまま受け入れ、自分が出来るだけ女性の存在の状態を超越しようとしたと考えている。しかしこうしたヒルデガルトについての見方はあまりにも一般的であるという理由で間違っていると考えられる。

1, ヒルデガルトの女性としての自己意識と自己解釈

神秘主義という概念は、女性の作者の場合には、その作品が神秘主義の特徴を申し分無く備えているにもかかわらず、男性の場合のそれより遙かに広く捉えられている。女性は哲学的に造詣の深い権威ある神学者として登場することが不可能であったので、その時代に激しく議論されていた問題について自分の見解を述べたり、更には政治的影響を及ぼしたり、時代批判を行ったりするために、彼女達は別の方法を捜さなければならなかった。つまり自分の見た幻視、即ちビジョンの描写、ことにその解釈をそのために利用したのである。女性による神秘主義は、幻視とその解釈という形式を用いたが、それにもかかわらず、同時代の男性の作品の中に見出されるような道徳哲学的、歴史哲学的章句を含んでいたという点で時代に背を向けたものではなかった。公式の教授の地位が認められていなかった女性にとって、立入ることのできる領域は啓示として体験されたビジョンや神秘主義の領域に限定されていたので、彼女達はそこにおいて自らの予言的な言葉を正当化しなければならなかったのである。女性は、その作品が啓示として体験されたビジョンに基く限り本来神によって書かれたものであって、自らは価値の無い道具に過ぎないことを強調しなければならなかったのに対し、同時代の男性の歴史哲学者は人類史における神の働きについて、自己の見方を自己の名前で呈示することができたのである。

ビンゲンのヒルデガルトと他の女性神秘主義者に共通なのは謙虚さというトポス

(Bescheidenheitstopos) の裏に隠された強い召し出しの意識である。人間に話しかけるのに神が強者や尊敬されている人物ではなく弱者を選んだという聖書に記されている事実⁽³⁾に即して、まさにそれを逆用するため、彼女達は家父長制度的なその時代の女性像を利用している。ドイツの中世史家 Herbert Grundmann によるとヒルデガルトは無教育な予言者と見られることを欲したため自ら意識的にラテン語の教養を隠していたと見做されている。

(Vox dei) Tu quae es fragilis terra et in nomine femineo indocta in omni doctrina carnalium magistrorum, scilicet legere litteras secundum intelligentiam litteratorum, sed tantum tacta lumine meo quod tangit te interius cum incendio ut sol ardens, clama et enarra ac scribe haec mysteria mea quae vides et audis in mystica visione.⁽⁴⁾

このヒルデガルトの文章は旧約聖書の予言者達の召し出しについての箇所と大分似ていることがよく分る。特にイエレミアの一章によると、この予言者は自分がまだ非常に若いという理由で神からの召し出しを避けようとしている。即ちイエレミアの若者であることはヒルデガルトの女性であることと同様に弱さという象徴的な意義を持っていて、ヒルデガルトはイエレミアと同じ様に弱いものであるにもかかわらず、むしろ弱いものであるからこそ、神に選ばれる可能性があり、神からの心を照す聖寵を通して、強いものになりうるという意識を持っている。それゆえに、男女の区別無しに人間が神のパートナーになる場合、自分自身の弱さを強く感じていることがイエレミアの一章とヒルデガルトのこの文章の共通点であると思う。

次に“indocta in omni doctrina carnalium magistrorum” という言葉について述べたい。それはヒルデガルトが肉体的教師即ち carnalium magistrorum の教えを受け入れないで、その代りに神からの精神的な教え、即ち“haec mysteria mea”を受けているということを意味している。ここでヒルデガルトは普通の学問的な教育、即ち彼女も修道者として受けていた septem artes liberales 等の教育を肉体的な教えと解釈し、神からの精神的な教えと比べて、低いものであると言いながら、自分のこうした、肉体的であると言われる教育を隠している。女性に対して、普通の教育の制限がいくらあっても、神からの精神的な教えを制限無しに受ける可能性があるということがヒルデガルトの言わんとしていることなのである。したがってヒルデガルトが女性であるために、自分の人間性について否定的な解釈をしたと言うある学

者の見方は正しくないと思われる。

2. 男性の強さと女性の弱さについてのヒルデガルトの見方

教父時代と共にスコラ哲学の人間像が非常に家父長制度的なものであることはよく知られている。女性は常に“in statu subordinationis”即ち色々な意味で男性の下であるという点で凡ての哲学者が一致していたことは確かである。同時代の女性達がこの男性の哲学者によって作られていた女性像をそのまま受け入れて、それを承認したかどうかという問題は、近來の女性学の研究対象になっている。この問題点を根本にしてヒルデガルトの作品を深く読むと、彼女は同時代の男性の哲学者によって作られた人間像を書き直す必要を強く感じていたことがよく分る。勿論、ヒルデガルトは同時代の人間像に公けに反対するのではなく、むしろ先ずそれを繰り返す、そして後から女性の人間性について非常に積極的な解釈をしていることを私は証明できると思う。一般的に言えば、男性的な要素は女性的な要素と共に善悪両様の意味を持つことができる。例えば、男性の強さ、即ち *fortitudo* は同時代の人間像によると非常に積極的に解釈され、ヒルデガルトの作品の中でも神の創造力と比べられている。ただ、ヒルデガルトによると、男性の強さは悪い意味を持つことが出来るようになる。

Sicut enim vir fortitudine sua femineam mollietatem vincit, ita et crudelitas quorum-
dam hominum quietem aliorum in diebus illis.....consumet.
(5)

ここで *fortitudo viri* は残酷、即ち *crudelitas* と比べられて非常に悪い意味を持つようになる。また、*Liber vitae meritorum* の中で、*superbia* という *vitium* は悪い意味で男性的ならびに女性的な要素を通して、説明され、その *personification* された罪悪は男性の胸に象徴されている。

Et pectus virile habet (sc. *superbia*), quoniam tumorem vanae magnitudinis in corde
suo semper gerit.
(6)

こうした多くの例によってヒルデガルトが男性的な強さを積極的にだけではなく、非常に批判的にも見ていたと言えるように思う。

さて、女性の弱さについて、ヒルデガルトはどのように考えていたのであろうか。同時代の人間像と同様に、ヒルデガルトの作品においてもそれは否定的な意味

を持っていた。例えば、忠実でありたい人間には *muliebrem levitatem*、即ち女性的な軽薄さを捨てる必要があると、*Liber vitae meritorum* の中で述べている。しかし、この女性の弱さが非常に積極的に解釈される例も多く見出されるのであって、そのことが同時代の初期スコラ哲学の人間像とはかなり異なっている点であると思われる。ヒルデガルトは女性の弱さと関連したもの、即ち女性が *mollis et tenera* であること、また女性が *timida* であることを非常に高く評価している。女性の臆病、即ち女性が *timida* であることはヒルデガルトによると聖霊の七つの賜の一つである *timor Dei* を意味し、女性の *sapientia* とも関連したものである。

Deus feminam ita constituit, ut timorem ad ipsum, timorem etiam ad virum suum habeat. Unde iustum est quod mulier semper timida sit. Ipsa enim quasi domus sapientiae est, quoniam terrestria et coelestia in ipsa perficiuntur. Nam in altera parte homo per eam procedit, in altera autem bona opera cum verecundia castitatis in ipsa apparent.⁽⁷⁾

自分の神秘主義的な召し出しについてだけではなく、一般的にもヒルデガルトは女性が弱いものであっても、その弱さから強いものを生み出すということを指摘している。

Ipse etiam Deus virum fortem et feminam debilem creaverat, cuius debilitas mundum generavit. Et divinitas fortis est, caro autem Filii Dei infirma, per quam mundus in priorem vitam recuperatur.⁽⁸⁾

このテキストによると、女性の弱さと神の子であるキリストの人間性との間には類似性が見出される。即ち両方共弱いものでありながら、強いものを生むことができる。女性から生れるのは世界の人類であり、キリストの人間性、即ち *humana natura* を通して生れるのは世界の人類の救済である。この女性とキリストとの類似性はヒルデガルトの作品の中で非常に重要である。弱いものである女性から強いものが出て来る故に、女性はヒルデガルトの作品の中で強いものであるとも言われている。例えば、創世記の1の26について次のような解釈がある。

(sc. Deus) creavit hominem, masculum, scilicet maioris fortitudinis, feminam vero mollioris roboris.⁽⁹⁾

女性の最も柔らかい強さは彼女がいくら優しくても、力がある人間であることを意味している。ヒルデガルトは男性の堅さを石に、女性の柔らかさを土に比べて、

両性の協力の必要性を説いている。この堅さと柔らかさという特徴は不完全なものと最も完全なものを意味しているのであって、例えば旧約時代においては神が人々の心の堅さのために律法を与え、新約時代においては人々の心が柔らかくなったために福音を与えたということが述べられる。

Deus in veteri lege duritiam hominibus proposuit, quia ad eum duritiam et non molli-
tiam habebant, cum postea in nova lege emollita corda eorum divina verba perciperent.⁽¹⁰⁾

これは女性の弱さが新約聖書的であり、旧約の堅さを現している男性よりも完全なものでありうることを意味しているのではないであろうか。ヒルデガルトはそれを明確に記してはいない。しかし男女についてこのような見方は暗示されている。彼女が明確に主張したのは男性と女性の協力の必要性なのである。そのためにヒルデガルトは聖書の言葉、即ちコリント前書、11の9に出ている、女性は男性のために作られたという言葉に、⁽¹¹⁾ et vir propter mulierem factus est という言葉を付け加えている。この主張はパートナーシップという考え方への出発点となるものではないであろうか。

3. ヒルデガルトの歴史哲学と人間像との関係

ヒルデガルトの歴史観は環状的、即ち *zyklisch* であるゆえに、彼女は人類の救済史における悪い状態もよい状態も繰り返されると考えている。勿論、彼女は後にアラビア哲学の影響を通して、ヨーロッパの思想に入って来た世界の永遠性 (*aeternitas*) の主張を承認してはいない。ただ救済史は直線的に進歩するのではなく、常に改革の必要性があるということを彼女は指摘するのである。同時代の社会や教会は非常に悪い状態に置かれていたので、エバの罪が戻って来たという表現を使って、彼女は時代批判をしたのである。特に聖職売買を通して墮落した教会を強く批判する意図を似てヒルデガルトは *tempus muliebris debilitatis* という言葉で同時代の危険な状態を記述している。これは彼女が女性の人間性を否定的に見ることではなく、象徴的な歴史の見方を持っていたことを意味している。即ち、一番最初の罪が人間と自然に悪い影響を及ぼしたと同じ様に、同時代の社会や教会の墮落も絶望的な結果をもたらすであろうということが彼女の言わんとしたことなのである。

.....et tunc muliebre tempus fere primo casui simile venit, ita ut omnis iustitia secun-

(12)

dum infirmitatem mulieris debilitata est.

しかし、ヒルデガルトは女性を否定的な意味だけでなく、積極的な意味でも歴史の状態のシンボルにしている。即ち、将来に期待されている平和と正義の時代も女性を通して記述され、その時代は童貞マリアから生れたキリストの時代、即ち、*aetas virginis* の繰り返しとして解釈されている。

In diebus itaque supradictis suavissimae nubes cum suavissimo aere terram tangent, ... quia homines ad omnem iustitiam tunc praeparabunt.....diem illum inspicientes quem nobis stirps aurorae videlicet stellae maris Mariae ostendit.
(13)

ヒルデガルトは旧約聖書の予言者ヨエルの言葉（3の1）を引用し、その時には男性も女性も予言するであろうと言って、男女の宗教的な平等性を明らかにしている。ヒルデガルトによると、*virginitas* はマリアが可能にした救済史の新しい状態と関係があるために、*virgo* としての女性にはマリアのように世界の救済のために働く可能性がある。したがって、彼女は *virgo* である女性が完全な女性であると考えている。

教父時代から同時代まで、男性の哲学者と神学者が童貞の誓願を守っている女性の活動はもはや女性的ではなく、男性的である、即ち *virginum opera virilia opera* であると言っているにもかかわらず、ヒルデガルトは *virgo* の女性らしさを強く主張している。

ビンゲンのヒルデガルトにおいて明確に見られることは、同時代の女性像の家父長制度的な特徴がおのずから変化しているということである。ヒルデガルトは女性が人間性の不完全な成長形態であるとは考えなかったのであり、*virgo* としての女性はむしろ従属状態を免れているという自覚を持っていたのである。

ヒルデガルトは後にロマン主義、即ち Friedrich Schlegel 等において支配的となる分極性に基く人間像を準備したのであり、この人間像によれば男性と女性は楕円形の二つの焦点のような関係にある。このような見方によって、彼女は全く中世的人間でありながら、時代を遙かに越えていたとすることができる。現在、われわれは分極性に基く人間像から、収斂性に基く人間像に移行し、徐々に男性と女性に共通な人間性を発見し、それを実現しようと努めているが、今日でもヒルデガルトのテキストにはわれわれに直接訴えるものがある。

註

- (1) Actes du Colloque tenu à Poitiers les 23 - 25. septembre 1976, Poitiers 1977
- (2) A. Dempf, *Sacrum Imperium. Geschichts- und Staatsphilosophie des Mittelalters und der politischen Renaissance*, Munchen 1962³.
- (3) H. Grundmann, Die Frauen und die Literatur im Mittelalter, in: *Archiv für Kulturgeschichte* 26 (1930) 129 - 161.
- (4) *Scivias* II, 1, PL 197, 443.
- (5) *De operatione Dei* III, 10, PL 197, 1019, s.
- (6) *Liber vitae meritorum* III, 34, 42, ed. Pitra, 119 s.
- (7) *Liber vitae meritorum* I, 82, 96, ed. Pitra, 43 s.
- (8) *Liber vitae meritorum* IV, 24, 32, ed. Pitra, 157 s.
- (9) *De operatione Dei* II, 5, PL 197, 945.
- (10) *Liber vitae meritorum* II, 27, 36, ed. Pitra, 73 s.
- (11) *Scivias* I, 2, PL 197, 392.
- (12) *Vita S. Disibodi* V, ed. Pitra, 355.
- (13) *De operatione Dei* III, 10, PL 197, 1022 s.